

原著 (Article)

## 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (XIII)

——補足、北粕谷区本伝来の周辺——

**Kumano-Kanjin-Jikkai Mandara and Its Roots (XIII):  
Additional Research on the Background of Kitakasuyaku's  
Collection**

宮川 充司\*  
MIYAKAWA, Juji\*

### 要 旨

北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅と那智参詣曼荼羅は、知多市指定文化財の指定を受けている熊野信仰に関連した民俗文化財である。これらの絵画は、江戸時代初期に熊野比丘尼が所持し絵解きに使用したと推定されている絵画史料であるが、その伝来についての資料は現存していない。その絵画資料が伝来していた十王堂と十王堂念仏、その十王堂があったといわれる八社神社に関する附帯資料を調査し、これらの民俗文化財の伝来の背景を検討した。

**キーワード**：熊野観心十界曼荼羅、那智参詣曼荼羅、北粕谷区本、十王堂、八社神社

**Key words** : Kumano-Kanjin-Jikkai Mandara, Nachi Pilgrimage Mandara, Kitakasuyaku's Collection, Temple of Ten Underworld Judges, Hasha Shrine

### 北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅・那智参詣曼荼羅

室町時代後期から江戸時代中期にかけて、熊野三山への勧進のために熊野比丘尼と呼ばれた女性宗教者が各地で活動していたといわれる。その熊野比丘尼達が、勧進のための絵解きに使用したのではないかと考えられていた民俗絵画の1つが、熊野観心十界曼荼羅である。その学術的研究は萩原（1983）に始まり、小栗栖（2004）により体系化され、さらに小栗栖（2011）により完成の域に到達した。小栗栖（2011）は、熊野観心十界曼荼羅を、定型本・模写本・別本に分類し、特に熊野比丘尼が所持し絵解きに用いたものとして伝来したと考えられるものを42例の定型本として、甲・乙・丙の3系統、絵画の表現形式からⅠ～Ⅺ形式に分類した。また、その熊野観心十界曼荼羅と一具として那智参詣曼荼羅が伝来しているものを8例（8組）挙げていた。小栗栖（2011）以降新たに確認された作例として、宮川（2019）は北粕谷区本の作例を報告した。また、この北粕谷区本は那智参詣曼荼羅を一具として伝来した9例目のものと位置づけることができる。また、愛知県内の確認例として、熊野観心十界曼荼羅としては一宮市（旧尾西市萩原）の浄観寺本、岡崎市の福聚寺本について3例目、那

智参詣曼荼羅としては岡崎市の明星院本に次いで2例目であった。浄観寺はかつて浄土宗の尼寺、明星院は修験道の寺院として所在したものであった。臨済宗妙心寺派の福聚寺は修験や熊野比丘尼との関係は定かではない。また、前稿で北粕谷区本と名付けた熊野観心十界曼荼羅は、小栗栖の分類からは、甲系統Ⅱ形式という、熊野観心十界曼荼羅が制作された年代からは、比較的初期の素朴な絵画表現形式を留めるものであることが、属性を数値化し多変量解析の1つ、階層的クラスター分析の手法で分析・分類した結果、判断できた。甲系統Ⅰ形式に分類される興善寺本も、時代的にもっとも古い表現形式をもちながらも保存状態がよいものであるが、この北粕谷本熊野観心十界曼荼羅はほとんど無傷といっても良い状態のまま伝世されており、他のどの熊野観心十界曼荼羅と比べてももっとも良い保存状態で伝来されているのも1つの大きな謎といえる。

一方、北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅が伝来した随應寺十王堂は、明治初年の神仏分離令までは、隣接する八社大明神（現在の八社神社）の鳥居右手前にあり、それを明治初年に臨済宗妙心寺派の古寺流水山随應寺の境内に移築したものだという。その元の場所を十王堂念仏講当人の一人青木哲雄氏にお尋ねしたところ、『知多市誌 資料編一 近世村絵図集』という出版物があり、そこに北粕谷村絵図がある。その中の八社大明神の鳥居手前の右脇に十王堂の位置が記されている」ということを、ご教示いただいた。これらの絵図は、徳川林政史研究所が所蔵している絵図を忠実に再現印刷したものであるとその解説に記されている。この絵図の製作された時期は、絵図そのものに記載がなく不明とされているが、年代記載のある並びの村々の記載から江戸後期の天保一弘化年間（1830年～1848年）頃に作られたものと考えられている。また、その村絵図には、八社大明神の本殿の右並び随應寺との境に大日如来と記された御堂の絵が描かれている。大日如来は、神仏習合の時代天照大御神と同体とされていた仏であり、八社大明神の祭神に、熱田大明神、伊勢皇大神宮、熊野権現が祀られており、天照大御神が共通した祭神であるので不思議ではない。また、この御堂が修験の寺院であったと考えてもおかしくないが、残念ながら、江戸時代末までの現存の史料としてこの大日堂を記したものは北粕谷村絵図以外には乏しい。

安永八年（1779年）に蛙面坊茶町（作者名、本名鈴木作助という尾張藩下級藩士）自序とある『蓬州旧勝録』全十九巻の書物が、愛知県図書館に所蔵されている。この書物は、同時に愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリーとしてインターネット上で公開されている。その「十八 知多郡」の「大野庄」の中に北粕谷村八社大明神社と随應寺の記載があり、その八社大明神社の項に大日堂と十王堂の記載がある。この文献が、八社大明神の中にあった大日堂と十王堂について記載する一番古い文献の可能性はある。

『蓬州旧勝録』 安永八年（1779） 蛙面坊茶町自序  
愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/28.html>

十八 知多郡大野庄

社人

○八社大明神社 北粕屋村 青木弥太夫

本宮大社二棟 摂社左右二社 石鳥井

拜殿 鐘樓 (大日堂 是ハ 村扣也

十王堂

祭六月ノ間山車一輛提灯を灯シ神前へ曳渡ス 試楽と云ハ

無し亦臨て舞の屋台を廻り行列にて渡し神前にて舞う

六月亦八月祭とせり 是ハ八月の間に境内大森見渡廣林本大社之 印

○ 北粕谷村寺内 禅臨岡田村慈雲寺末

六畝六歩備前除 流水山隨應寺

本尊釈迦仏 中興開山心營鉄首座

また、北粕谷区（1984）が発行した『八社神社御由緒累記』という冊子を前述の青木氏からご提供いただいた。その中に文化三年（1806年）六月の八社大明神文書が引用されており、大日堂と十王堂については次の様に記されている。

一、大日堂 式間四面 壺宇

但 瓦葺

右堂は同隨應寺控

右境内之間

一、十王堂 式間四面 壺宇

但 瓦葺

右堂は村方控 (同書 p. 9)

大日堂は、隨應寺と神社の境内の間にあり、また十王堂と同じ二間四方の大きさで建てられていたことがわかる。また、その冊子には、天保九年（1838年）六月の『大般若經寄進名簿』という文書が記載されており、新版大般若經を新たに購入した時の寄進者名簿に「北粕谷村 願主 粕堂元梁僧」と記され、その願主を十王堂の堂守僧元梁としている。天保頃の十王堂に関する限られた手がかりである。

この大日堂もしくは本尊大日如来像は、明治初年に十王堂とともに隣接する隨應寺に移されたという（知多市誌編さん委員会編集、1978）。現在、隨應寺には、客仏として大日如来像は現存しているということであるが、大日堂は現存していない。北粕谷区、江戸時代の名称で北粕谷村に限らず、知多半島全域にいえることであるが、少なくとも江戸時代には尾張藩領で2つの鳴海代官所と横須賀代官所支配にあったことなどもあり、かなり詳しい村々や寺社に関する文献的史料が残されている。八社大明

神あるいは隨應寺についてもしかりである。隨應寺十王堂についても、熊野観心十界曼荼羅の伝来についての手がかりは何も残されていないが、お盆と春秋彼岸の行事として、十王堂念仏が行われるが、その際熊野観心十界曼荼羅を壁に掛けて供養が行われるということを、上述の青木氏からご教示いただいた。その十王堂念仏の行事を含めて、隨應寺十王堂に関係した史料で、熊野観心十界曼荼羅が伝来した手がかり、すなわち熊野修験や熊野比丘尼との接点となる史料が見出されるかの調査が必要である。

一方、北粕谷区本那智参詣曼荼羅は、八社神社の山車倉から発見されたもので、前述の青木氏によるとそれ以前の伝来は全く不明であるという。わずかな手がかりは、前稿でふれたように、その絵画史料が納められている箱の表書きに「熊野権現図 紙本 壹幅」とあり、その箱蓋の裏書きに「大正参年拾貳月修理 修理費金参拾円也」とあり、その下には「旭村大字金沢區長 竹内國太郎 八社神社 社掌 青木伊織」二人の名前が併記されている（宮川，2019）。したがって、少なくとも大正初期には、この絵画史料は掛け軸として表具され、八社神社に伝来したものとして判断することができるが、それ以前の所蔵はどのような変遷を辿ったのか、いつ頃からなぜこの神社に伝来していたのか、依然として不明である。八社神社は、江戸時代末までは八社大明神または八社明神と称された古社であるが、江戸時代の神社の名称を含めて謎の多い神社である。

## 隨應寺十王堂念仏と十王堂の補足調査

臨済宗妙心寺派流水山隨應寺の境内に、北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅が伝来した十王堂がある。この十王堂は明治初年の神仏分離令により、八社明神から移築されたものだという。隨應寺十王堂は、お盆と春秋の彼岸に熊野観心十界曼荼羅を掛けて十王堂念仏が行われているということであるので、その行事と十王堂そのものについての補足調査を行った。文化元年（1804年）の再建札以外にめぼしい資料はないということであったが、2019年8月16日送り盆の日に朝8時半から行われた十王堂念仏と、同じく9月23日秋彼岸中日8時から行われた十王堂念仏を調査させていただき、合わせてその付帯資料の補足調査をさせていただいた。8月16日はまず8時から隨應寺本堂で盆施餓鬼の供養を行った後、8時半から十王堂で念仏供養が行われた。十王堂念仏の所要時間は約1時間であった。当日の十王堂は、図1と図2のような室礼であった。本尊地藏菩薩座像と十王の前に、大小2つの念仏鉦が伏せ鉦として置かれていた。左脇の壁に、熊野観心十界曼荼羅が掛けられ、その右側に「各戦役戦病死者」の軸、左側に「三世諸仏之図」の軸が重ねて掛けられていた。この三世諸仏之図は、熊野観心十界曼荼羅との共箱として伝来しているものである。紙本墨色版刷のような作品で、それ程古いものではなく幕末から明治時代に作られたもののよう判断されるが、図柄が大変ユーモラスなものである。「各戦役戦病死者」の軸は、日清・





図1 十王堂内部

中央上が本尊地藏菩薩座像 中央下が閻魔大王



図2 十王堂右脇

向かって中央が熊野観心十界曼荼羅 右が各戦役戦病死者の軸 左が三世諸佛之図

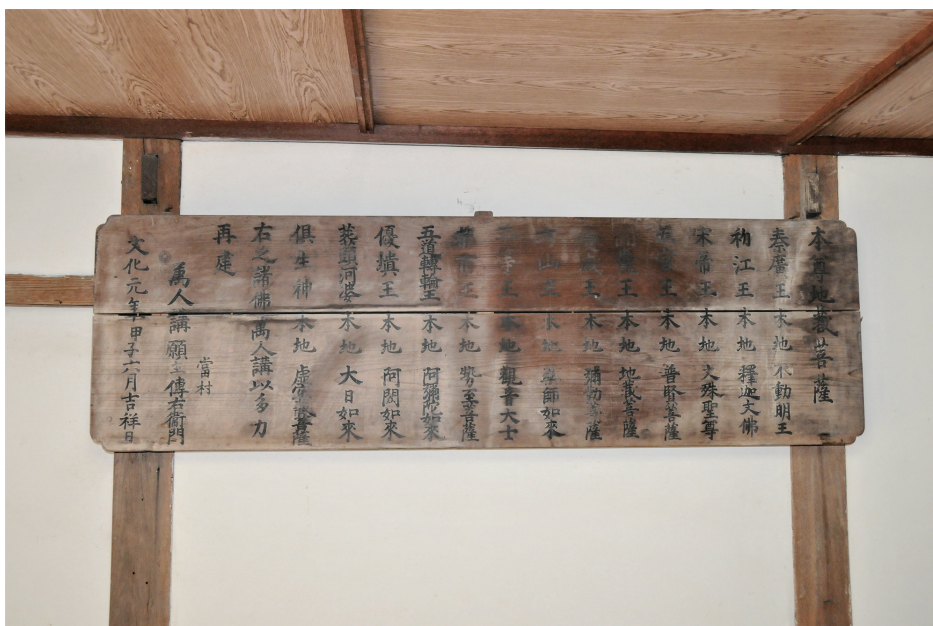


図3 十王堂左脇 文化元年再建札



図4 延宝三年銘念仏鈺（裏面）

裏面：直径21.0cm 表面：直径18.0cm, 高さ6.0cm



日露戦争から第2次世界大戦の北粕谷村の戦病死者の法名ないし戒名を、羽根地区の臨済宗妙心寺派の慧日山普明院の永岳住職が書かれたものである。したがって、この軸は戦後のものである。十王堂左脇の軸物のかけ方は戦後のものである。

また、図3に示す左脇の文化元年の再建札は、「右之諸佛萬人講以多力 再建 萬人講願主 當村 傳右衛門 文化元年甲子六月吉祥日」と記され、文化元年六月に万人講の傳右衛門が寄進したことで、本尊地藏菩薩と十王その本地仏との対照が記されている。この再建札の翻刻は、竹内（1983）・江端（1999）に掲載されているが、ここでも翻刻一として示す。先行する翻刻より、一文字だけ異なっている。七番目の「泰山王」ないし「太山王」と書かれるべきものが、原本と先行する翻刻とも「大山王」（おそらく同音略表記）と記されているが、ここでは「太山王」と翻刻して表わす。

文化元年甲子六月吉祥日	萬人講願主傳右衛門 當村	再建	右之諸佛萬人講以多力	俱生神	葬頭河婆	優填王	五道轉輪王	都市王	平等王	太山王	變成王	閻魔王	五官王	宋帝王	初江王	秦廣王	本尊地藏菩薩
			本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地	本地
			虛空藏菩薩	大日如来	阿閼如来	勢至菩薩	阿彌陀如来	觀音大士	藥師如来	彌勒菩薩	地藏菩薩	普賢菩薩	文殊聖尊	釈迦如来	不動明王		

翻刻一 隨應寺十王堂再建札

「本尊地藏菩薩」から順に「秦廣王 本地 不動明王」「初江王 本地 釈迦如来」「宋帝王 本地 文殊聖尊」「五官王 本地 普賢菩薩」「閻魔王 本地 地藏菩薩」「變成王 本地 彌勒菩薩」「太山王 本地 藥師如来」「平等王 本地 觀音大士」「都市王 本地 勢至菩薩」「五道轉輪王 本地 阿彌陀如来」と十王と本地仏が記される。次に閻魔庁の冥官として通常は「司命」「司録」または「閻黒童子」「俱生神」と記されるものが、この作例では「優填王 本地 阿閼如来」「俱生神 本地 虛空藏菩薩」と記され、その間に「葬頭河婆 本地 大日如来」が記されている。「葬頭河婆」は通称「脱衣婆」とよばれるが、図1で前列左から2番目の座像である。

「司命」「司録」または別の作例では「閻黒童子」「俱生神」で、通常は中央の閻魔大王の左右に置かれるが、この例では「葬頭河婆」の左右に置かれている。その向かって右側が「優填王」左側が「俱生神」と考えられる。融通念仏の道場の1つであった嵯峨清涼寺の「釈迦堂縁起」にある「優填王」は仏陀に帰依し、生身写の釈迦像を作ったという伝説の古代インドの王であるが、閻魔王または十王像の眷属としては特異な例といえる。「閻黒童子」とされるべきものが、「優填王」に置き換えられてしまったものかもしれない。

また、「俱生神」の前に亡者の生前の罪業を測る業秤が置かれているが、その秤に

乗せられるのは、通常は亡者であるが、この例では亡者の代わりに男女の首が乗っている。ただし、この男女の首は、浄玻璃鏡・業秤とともに閻魔王庁に置かれている「檀茶幢」と呼ばれる人頭幢の上部ではなかったかと推定される。檀茶幢は、亡者の善悪を一目で見極めることができるとされるもので、柱の上に向かって右に暗闇天女幢、左に泰山府君幢が置かれる。1つの考え方としては、元は業秤とは別に作られた檀茶幢の柱部分が失われ、その上部に置かれていた暗闇天女幢・泰山府君幢が後に業秤に移し変えられたと推定するのが自然であろう。ただし、詳細な原物の調査を実施していないので、その推定が正しいかどうかは確認できていない。なお、十王像については、制作年等の記録はないということである（竹内、1983；江端、1999）。

今回の調査での唯一の新しい発見は、土地の人がさほど意識をせず使用してきた念仏鉦（大）の裏側を拝見させていただいたところ、図4に示すように「為覚應宗意并施主京太宮通布屋源右衛門心營浄三 延宝三乙卯十一月十五日 天下一大和大掾氏次作」と延宝三年（1670年）の鋳造年が裏に刻まれた宗味鉦吾（紐が掛けられる形状の念仏鉦）であることがわかった。寄進者が、心營浄三の法名ないし戒名をもつ京都大宮通の布屋源右衛門という人で、縁故の覚應宗意の菩提の為に、天下一大和大掾の称号と官位を持つ鋳物の名人氏次に延宝三年に鋳造させたものであることが読み取れる。法名ないし戒名と念仏鉦であることから浄土系の信者を思わせるが、時代的に、熊野比丘尼がまだ活躍していた時代であるので興味深いものがある。八社大明神あるいはその十王堂が地域の信仰を集めたとしても、京都の商人からの寄進となると疑問があり、可能性としてはこの商人の縁者である尼僧または帰依している僧侶に寄進したのではないかと考えられる。ただし、隨應寺は臨済宗妙心寺派の禅寺であるので、この寺の住職ではないだろう。十王堂そのものに関わる尼僧がその寄進された相手だとすると、正に熊野比丘尼の持ち物であった可能性が出てくるが、それ以上のことを確認できる資料は残っていない。なお、江端（1999）によると、近くの新井村南根に羽根葉師堂という尼僧のお堂があったとか、大草村に芝崎葉師と呼ばれる尼寺があったということであるので、何らかの関わりがあったとしても不思議はないだろう。

なお、この十王堂で行われてきた十王堂念仏の内容であるが、『現世利益十五和讃念佛清規』という経題箋が貼られた独自の経本によっている。これは、坂本（2019）が広く紹介している大野谷虫供養、すなわち旧大野庄であった大野谷十三カ村が四百年前から伝えてきた宗教民俗的な伝統行事で用いられている経本で、旧村にあたる地区ごとに少しずつ異なるものを伝えているが、その北粕谷区が伝えている虫供養の経と、基本的に同じ経であり、最後の回向文のみが異なるということを示す十王堂の当人の青木哲雄氏から教えていただいた。中心的な経は、天台宗・真言宗・禅宗・修験等多くの宗派で使われている「般若心経」と浄土真宗特有「現世利益十五和讃」であるが、「三宝礼」、特定できない「陀羅尼」<sup>1)</sup>、「懺悔文」「延命十句観音経」「舍利礼文」「攝益文」「総回向」「ナンマイダアブツ ナンマイダア（念仏七返）」「十三仏真言」といった構成からなるもので、複数宗派の経の組み合わせという感触が強い念仏であ

り、十王堂念仏にしても、寺院が関与せず、大小2つの念仏鉦を用いて当人衆のみで行われる念仏であることが特異な側面である。

## 中世から江戸時代末までの史料における知多郡北粕谷村、八社大明神と隨應寺

北粕谷区本那智参詣曼荼羅、あるいは北粕谷区本熊野觀心十界曼荼羅が伝来した隨應寺十王堂の元の所在場所は、知多郡大野庄北粕谷村の八社大明神、現在の知多市金沢にある八社神社であった。この金沢という地名は、明治の初め近隣五箇村を併合し1つの村を編成した際に名乗った村名で、現在は旧羽根村と旧北粕谷村の字としてこの地名を残しているという。また、この金沢村という地名は、承久の乱の折、この大野之庄一帯を治めていた大野頼清・頼重親子が後鳥羽上皇側に味方し討ち取られた後、大野氏の本領が没収された。その後この土地は北条方の六波羅探題の兵糧所となり、大仏氏と金沢氏の領地になったことによるという（杉崎，1981）。また、14世紀の初頭頃から、三河国に拠点のあった一色氏が知多半島にも勢力を広げて行くが、14世紀中頃には大野谷一帯に一色氏との関わりが深い寺社や城（砦）が増えていくのは、その時代の一色氏の勢力拡大を示すものであり、正和三年（1316年）に一色左京太夫道秀が大野庄小倉（現常滑市）に時宗の蓮台寺を創建したのは一色氏の知多郡への侵出の手がかりであると、知多市誌編さん委員会編『知多市誌 本文編』に記されている（立松，1981）。また同書には、宝暦二年（1752年）松平秀雲（号君山）が執筆した『張州府志』にある八社神社に関わる記載「在北糟屋村祀伊勢熱田八剱熊野多度八幡天王源大夫故稱八所本國帳正四位樂屋天神是也 寛正三年壬午大草城主一色兵部少輔某重修之同四年癸未落成 神寶大般若經一部承久中所藏也歷年為虫魚害之正和中僧慶菫菅原景光共修補之」を、寛正三年（1462年）から翌年にかけて大草城主一色兵部少輔義遠が北粕谷村の八所（宮）の社殿を再建したとしている。また、この社に承久年間の大般若經が神宝として所蔵されているとあるが、大野氏が衰退する承久の乱であるので、その大野氏時代の八社神社に関わるものと考えたと貴重な史料である。この大般若經は、隨應寺に現存しているということであるが、詳細は不明である。この『張州府志』の記載は、次に記述する八社神社の文明二年（1470年）の棟札に記載されている事項であると考えられる。なお、その文明二年は応仁の乱（応仁元年（1467年）～文明九年（1478年））の最中である。足利氏の流れを汲む一色氏であったため、応仁の乱にも巻き込まれ、知多郡における一色氏の支配は衰退していく。一色氏の代官をしていた佐治氏が、一色氏に代わって大野庄一帯を支配していくことになった。その佐治氏も、天正十二年（1584年）の小牧長久手の戦いの前哨戦で織田信雄によって滅ぼされてしまった（立松，1981）。

八社神社の古名や祭神・由来・寄進者等は、残されている文明二年と天正二年（1574年）の二枚の古い棟札、末社の棟札を含むそれ以降の計二十三枚の棟札から窺



い知ることができる。二十三枚の棟札のうち、二十一枚は知多市誌編さん委員会（1983）『知多市誌資料編二』「第四章金石文 八社神社（北粕谷）」にモノクロ写真が掲載されている（pp. 524-527）。ただし、そのモノクロ写真では、それぞれの札に記されている小さな文字はほとんど判読できない。また、その書籍で使用された当該の写真ネガは所在不明ということだった。

そこで、2019年8月6日に、これらの古い棟札を含めて八社神社所蔵の棟札の確認調査をさせていただいた。その折上記の書籍に未収録だった天明八年（1788年）の「奉両覆上葺八社大明神社」棟札と、天保七年（1836年）の「奉祈祝八社大明神」と書かれた札があるのに気がついた。前者は屋根の葺き替えの棟札であるが、後者は、社の建て替えや屋根の葺き替えなどの棟札というより、記載文から「御米貳拾石八斗四升四合」の寄進札のように読むことができる。

さて、文明二年（1470年）と天正二年（1574年）の二枚の古い棟札は、この神社の名称や祭神・由来・寄進者等について記載された貴重な史料である。

文明二年の棟札は、安永年間頃（1772～1780年）内藤正参（雅号東甫）が領内調査により執筆した『張州雑志』にこの棟札のこととその翻刻が記されており、その当時すでに300年の経年劣化によりかなりの箇所が判読困難な状態になっていたことが判断できる。典拠とした『張州雑志』は、愛知県郷土資料刊行会が昭和50年（1975年）に名古屋市蓬左文庫蔵の同書を復刻した刊行版によっている。

この文明二年の棟札の銘文は、天正二年の棟札とともに、『張州雑志』よりさらに200年を経た後、知多市誌編さん委員会の『知多市誌資料編二』「第四章金石文 八社神社（北粕谷）」（竹内，1983，p. 485）に翻刻され掲載されている。文明二年の棟札の翻刻については、内藤正参の『張州雑志』掲載の翻刻より、知多市誌編さん委員会の翻刻の方が判読翻刻されている文字部分が若干多い。また、『張州雑志』と『知多市誌資料編二』の翻刻に若干部分異なる箇所がある。

文明二年の棟札をデジタル一眼レフカメラで撮影した写真を図5に、天正二年の棟札の撮影写真を図6に示す。これは、あくまで確認のための資料撮影であったため、全体的な写真撮影で、部分的な接写撮影はほとんど行わなかった。それでも、デジタル写真であるため、画像ソフトPhotoshop Element 2019を使い撮影画像をパソコンの画面上で部分拡大して見たところ、文明二年の棟札について先行する2つの翻刻で異なる文字などごくわずかな文字が判読できた箇所もある。こちらの翻刻では、できる限り棟札の字体に近い文字を当て、異体字についても同様であるが、必ずしも先行する翻刻が誤りであるという指摘をするつもりではない。天正二年の棟札についても竹内（1983）の翻刻のごく一部の文字について、同様に若干の訂正を加えた。天正二年の棟札については、裏側に記された裏書き部分については、先行研究では触れていないので、資料として示す。

文明二年の棟札の翻刻については翻刻二、天正二年の棟札については翻刻三として参考までに示す。なお、江戸初期の棟札として、正保二年（1645年）の棟札と、貞



図5 八社神社文明二年（1470年）棟札

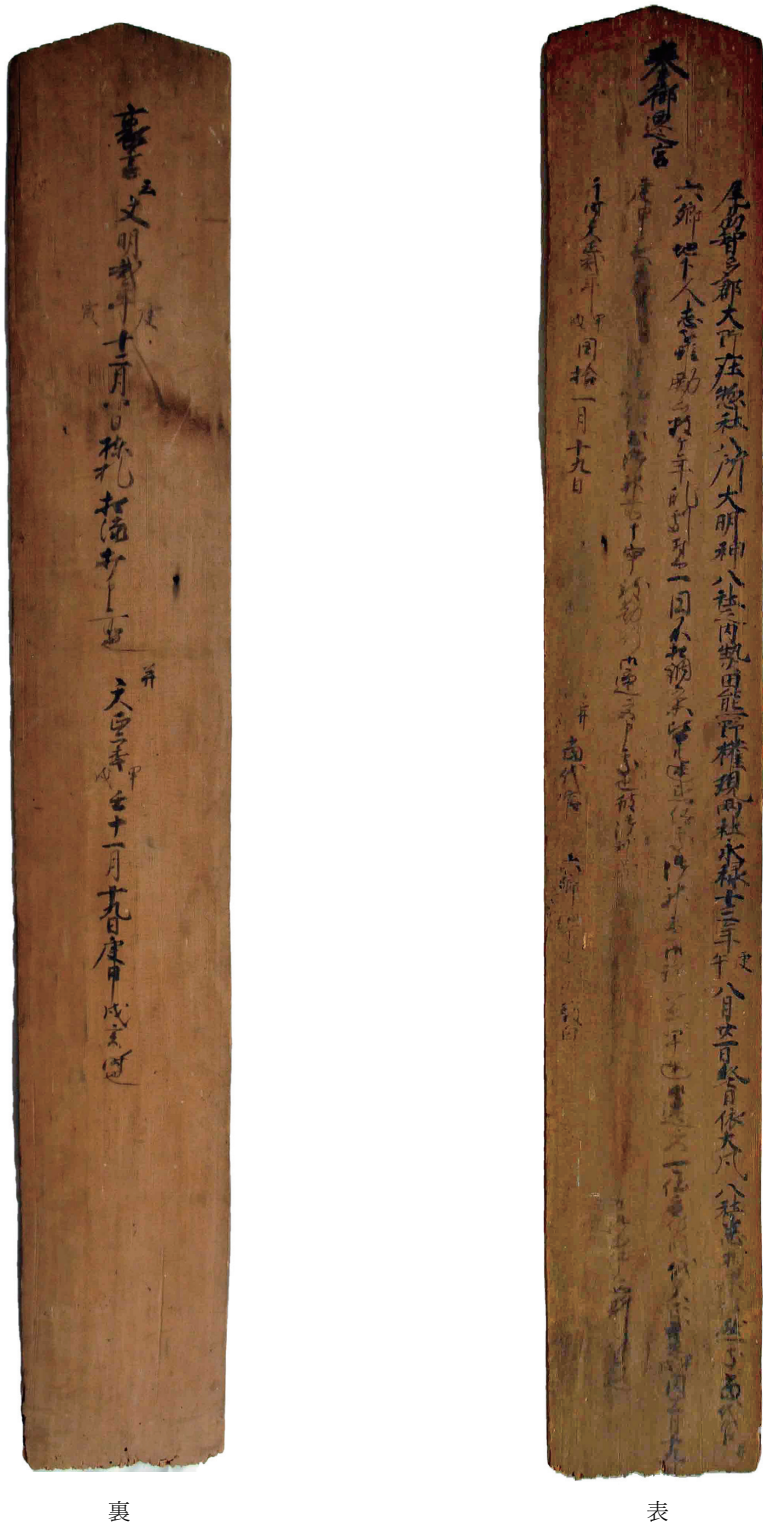


図6 八社神社天正二年（1574年）棟札





裏

表

図7 八社神社正保二年（1645年）棟札



図8 八社神社貞享五年（1688年）棟札



翻刻二 八所宮 文明二年（一四七〇年）棟札

内藤正参の『張州雜志』及び知多市誌翻刻に『知多市誌 資料編二』四八五頁の翻刻を重ね一部補正

表

大日本國尾張郡大野相社八所宮之目錄之次第 大破及事貳十餘年斗其後一色殿聞被及代官  
 被仰而地下人談合於御尋候處 開基宗 依有志願主定所也 寛正三年<sup>壬午</sup>六月廿六日新始申候所也  
 御柱立森奥社同社頭□□の記して同八月廿二日未之時柱立同□□ 申間未歳□棟上祝申□ 申之歳正月廿九日  
 其先一色兵部少殿御下向有候三川<sup>三</sup>為打取大野<sup>三</sup>之勤行為神祓中人 戊亥之時移申其後仕候畢文明二年<sup>庚寅</sup>十二月四日棟上申候  
 申候時御屋<sup>三</sup>御泊御代官之馬願主社屋之馬南北自<sup>三</sup>正霞主大工所 大丈巴  
 御陣へ願主<sup>三</sup>御屋<sup>三</sup>御安悦有候願主社屋之馬南北自<sup>三</sup>正霞主大工所 大丈巴  
 一色殿<sup>三</sup>或云 他國之人二候共彼之宮之造榮仕候事 不思議候八社之御社 皆文明式年<sup>庚寅</sup>十二月四日願主<sup>三</sup>敬白  
 大野南槽谷 他國之人二候共彼之宮之造榮仕候事 不思議候八社之御社 皆文明式年<sup>庚寅</sup>十二月四日願主<sup>三</sup>敬白

裏

造立 三十五万人也 代□人夫

注 卯（州） （<sup>とき</sup> 峯）

裏書きに三行記載あるものの右側冒頭一行の三カ所の文字以外判読困難  
 太字は、本稿の翻刻で補筆した部分。

翻刻三 八所大明神 天正二年（一五七四年）棟札

（『知多市誌 資料編二』四八五頁翻刻に一部補正 裏書き新たに翻刻）

表

奉御遷宮

尾<sup>尾</sup>智多郡大野庄惣社八所大明神八社之内熱田熊野權現兩社永祿十三年<sup>庚午</sup>八月廿一日終日依大風八社悉相果候然<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>當代官<sup>并</sup>  
六郷地下人志を雖<sup>レ</sup>勵ム数々年乱刮付而一同不扛調条皆民迷惑仕候<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>御神慮<sup>ニ</sup>宣<sup>ニ</sup>  
庚申夜<sup>□□</sup>御沙汰於御神前丁寧致勸行 御遷宮申候<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>也彼御礼前<sup>□□</sup>御出仕候如斯候者也  
于時天正貳年甲戌閏拾一月十九日 當代官六郷地下中敬白

裏

裏高<sup>玉</sup> 文明貳年十二月四日 棟札打流打上重<sup>并</sup>處也 天正二年<sup>甲戌</sup>十一月十九日庚申成実所也

寅

注 劬州 刮<sup>か</sup> 原翻刻では「劇」としている 季 年の異体字 壬<sup>うろ</sup> 閏の略字

太字は、本稿の翻刻で補筆した部分。

翻刻四 八所両社 正保二年（一六四五年）棟札

表

奉  
再  
建  
八  
所  
本  
時  
正  
保  
式  
子  
曆  
卯  
月  
既  
吉  
日  
也  
大  
工  
藤  
原  
家  
次  
甚  
右  
衛  
門  
敬  
白

裏  
記載なし

享五年（1688年）の棟札が残されている。正保二年の棟札は、図7にその画像、翻刻四にその翻刻を示すが、表に「奉再建八所両社」とのみ記載があり、再建に関しての詳しい事情は記載されていない。また、裏書きはない。また、貞享五年の棟札は文明二年と天正二年の再建について触れているが、不思議なことに正保二年の再建ないし棟札については触れていない。

貞享五年の棟札には、この社の由来や祭神等についてかなり詳しい記録が残されているが、当時の神主青木弥太夫家則あるいは大野牟山神社の祠官後藤式部行政の高い学識からか、異体字尽くしの棟札で手元の異体字辞典（山田，1987）を首引きで翻刻の試みを行ってみたが、異体字辞典で確認できない文字などかなり難読なもので、勘で読まざるを得なかった文字も含まれている。専門家の校閲を経ていないので、細部は誤読も含まれている可能性も否定できないが、この社の祭神や再建について最も詳しい記述がある史料であるため、その画像を図8として、また暫定的なものとしてその翻刻を翻刻五として示す。

さて、図5及び翻刻二として示す文明二年（1470年）の棟札であるが、650年の歳月を経ただけでなく、台風による社の倒壊により荒廃し棟札も破損文字の摩滅も著しく、判読困難な箇所も少なくない。ただし、この文明二年と次の天正二年の棟札に書かれている内容は、図8と翻刻五として示す貞享五年（1688年）に、社の由来として補完されているので、その棟札での記載を補いながら推定解釈した要旨を示す。

尾州知多郡大野庄の相社（同音の惣社の意とも、二つの社が並ぶ双社の意とも読める）八所宮は、大破して20年以上荒れ果てたままであった。領主である一色殿がそのことを聞き代官（おそらく佐治氏）を遣わして、寛正三年（1462年）六月二六日に新始を行い未の年（翌年）柱立て、棟上祝を行った。申の年（寛正五年）正月二十九日に完成した。

その後一色兵部少（一色義遠）が十月二十三日この神社で戦の祈願をし、軍勢を揃え三河の戦で勝利を得た。そこで文明二年十二月四日に再び（再建）棟上げを行い、絹千疋と太刀を寄進した。「御太刀十振八所一振寄進加是」と読めるが、この時寄進した太刀は貞享五年の棟札では二振とある。あるいは二百二年後の貞享五年に一色氏寄進の太刀が二振この神社に残っていたのかもしれない。次に、天正二年（1574年）の棟札の要旨を示す。

大野庄惣社八所大明神の八社の内、熱田大明神と熊野権現の両社のみならず、八社悉く永禄十三年（1570年）八月二十一日（貞享五年の棟札は永禄十三年を元亀元年

## 表

奉造立八社大明神

野大權現五殿多權大權現八幡宮七社大明天王八殿源太夫殿都而此奉勸於人所神靈故得八社名焉。欽而稽于越尾州知多郡相谷邑之一所居社者稱八幡社頭天也所謂太夫殿田大明神二殿伊勢太夫人三殿八幡大神四殿熊當社勸請之由緒何御宇不顯明當年久遠而難尋畢竟觀玄亦無地老都無必祇靈慕召冥今而屢感感激感應運成哉哉謂神德稱誠亦宜哉然無祇豈在神耶在神則豈無神力耶夫名不曰莫主乎往昔神威全盛之比八舍盡備足而其名擢風高三當郡不瞻仰之遠近乃民者也雖然八社願降年言久矣昔寬正中中色兵部少輔有勇士大破之林被聞及則可造宮之旨社人被致相侵既寬正三年壬戌林鐘下旬朔月日門造宮成就其頃彼兵部御卿向下向之刻為執款於三刻日大風吹大山山林動依之語乃殿祠悉顛倒為輝煌無事之御祈旬料足千足御乃二振彼奇速其後元元年庚午秋八月數日大風吹大山山林動依之語乃殿祠悉顛倒座殿或破壞其星霜幾許多而魚垂跡也亦減而無過於四社則元正貳年之頃有當社御神託曰急可造建之由依神教同年甲戌閏十一月奉遷宮者也從爾已還日往月來雨澤風凌覆覆為之墜椽椽為之脫舞廊亦旋倒瑞瑞亦存若亡亡茲茲夙夜每步之度難離辭之歲尚而書事不復已遍告諸主又村主兼惣民其意一致而同口一舌已備修造之功以謀勸化之儀且使當邑兒兒訪近鄉鄰里之在町哉乃庶費財與當富計一粒半錢之施施乃全恰巧因數百工終全成就於四箇殿社及拜殿靈鳴呼是勝乎命乎愉感乃伏所冀哉祚天禍四海靜靜一恭恭平國土安穩當村鎮靜民子快樂在化一所化五穀能成存錫再拜稽首而是作上棟之文依而傳後代表也焉告

當社神主  
青木弥太夫 家則  
大野牟山  
祠官 後藤式部 行政  
大埜大工  
二宮傳左衛門 正次

貞享五戊辰歲九月吉曜日

裏

棟札

當村惣氏子

當村庄屋

[illegible]

と直しているが、四月二十四日に改元が行われ元亀元年となっている）の台風により倒壊。棟札も流されるといった被害を被った。折から戦乱が続いていたため、数年の間、社は荒廃に任せる有様となった。そこでご神託があり、（社を建て替え）天正二年閏十一月十九日に遷宮を行った。

また、図7と翻刻四として示す、正保二年（1645年）の棟札は、「奉再建八所両社」とのみあり、この頃までは八所大明神と呼ばれ、そのうちの二つの社を再建したとのみ記されている。図8と翻刻五として示す貞享五年（1688年）の棟札は、次の様な社の由来を語っている。

尾州粕谷村の神社は八社大明神と称し、本社は熱田大明神であるが、伊勢大神宮、八剣大明神、熊野大権現、多度大権現、八幡宮、牛頭天王、源大夫社を祀っている。故に八社大明神である。由来は不詳。神社は長く荒廃していた。寛正年間に一色氏が再建した。寛正三年に用材を伐採し、翌年の二月に完成した。その頃一色兵部卿（少）が下向し、十月この神社で戦勝祈願をし、軍勢を揃え戦で勝利を得た。そこで絹千疋と太刀を寄進した。その後元亀元年（1570年）八月の大風で社は倒壊した。その後荒廃に任せたが、神託があり、再建を急ぎ天正二年閏十一月十九日に遷宮を行った。またもや荒廃したので、そこで貴賤富貴の人々から寄付を集め、四箇殿と拝殿を再建した。

寄進者は、北粕谷村の庄屋と南粕屋（谷）村の庄屋である。

上述のように文明二年（1470年）から貞享五年（1688年）までの4枚の棟札は、いずれも社殿の再建札である。それ以降の本殿に関わる棟札は、幕末の嘉永六年（1853年）の「奉再建拝殿」の棟札以外は、雨漏りの補修あるいは屋根の葺き替えの奉納札である。また、社の名称は八所大明神から、八社大明神に替わっている。宝永三年（1706年）、享保二十一年（1736年）、寛延三年（1750年）、明和四年（1767年）、天明八年（1788年）、天保三年（1832年）、弘化四年（1847年）、安政六年（1859年）「奉両覆上葺糟目神社」、万延元年（1860年）「奉上葺」は屋根の葺き替えである。安政四年（1857年）に別社と考えられる「牛頭天王 源太夫神社」の合祀社、「八幡宮 多度権現」の合祀社の「奉上葺修復」と記される。ちなみに、牛頭天王は津嶋神社の祭神で、明治以降は須佐之男命（素戔鳴命）と団体として置き換えられている。また、源大夫神社は熱田神宮の摂社で、現在の上知我麻神社にあたり、尾張氏の祖先神に当たる乎止與命（小止與命）を祭神としている。ただし、安政六年の棟札「奉両覆上葺糟目神社」は、本殿または拝殿にあたる社の屋根の葺き替えの棟札と考えられるが、幕末頃この神社の別名が糟目神社と呼ばれていた可能性を示すと考えられる。

この八社神社の名称は、明治初年以降の名称で、応仁の乱の最中文明二年の頃の名称は八所宮、戦国時代の天正二年の頃は八所大明神。江戸初期の正保二年（1645年）頃まではこの名称が使われていたと考えられる。北粕谷村ないし大野庄（大野谷十三カ村）の村の社であるにも関わらず、大明神という名称が使われていたのは、八社の内本社が熱田大明神であったためであろう。また、熱田神宮別宮の八剣大明神（八剣



社), 摂社の源大夫社(現在の上知我麻神社)も八所ないし八社の一として祀られていた。

## 八社大明神または櫟屋神社と隨應寺関連の江戸時代の関係諸文献

この北粕谷村, 八社大明神と隨應寺について, 江戸前期の記録は『寛文村々覚書』(尾張八郡寛文村々覚書)の知多郡『尾州智多郡覚書帳』にある「北粕谷村」の記載が信頼の置ける基礎史料として, 位置づけられている。『寛文村々覚書』は寛文年間(1661~1673年)に編纂された尾張藩内の村々の記録である。その中には, 隨應寺について寺名を記されているが, 八社神社については「明神」とのみ記されているだけである。また, 熊野観心十界曼荼羅が伝来した十王堂や大日堂については, 何も記されていない。

### 『寛文村々覚書』の内『尾州智多郡覚書帳』 北粕谷村

一 禅 宗	岡田村慈雲寺末寺	流水山隨應寺
寺内 六畝六歩	備前検除	
一 薬師堂 地内 年貢地		当村 庄屋支配
一 社式ケ所 内 明神 山神	当村祢宜 弥兵衛持内	
社内 五反式畝歩	前々除	

(寛文村々覚書(下) 知多郡(尾州智多郡覚書帳))

名古屋市教育委員会 昭和58年(1983年) 校訂復刻名古屋叢書続編 第三巻 寛文村々覚書(下) 地方古義 愛知県郷土資料刊行会 pp. 37-38)

隨應寺は, 流水山隨應寺と山号と寺領を含めて記されている。また, 一色氏が建立した長慶寺の遺堂ともいわれる薬師堂が残っていたが, これも後に隨應寺に移されている。八社大明神は明神としか記されていない。前述したように社の棟札は祭神への敬意を込めて, 八社大明神と記されているが, 公式には八社明神であったのかもしれない。江戸中期の元禄十一年(1698年), 尾張領内の神社について天野信景が, 延喜式内の名神社以外の神名について, やや神位の低い四位クラスの神社についても調査追加している。『國內神名牒』あるいは『尾張神名帳』である。天野信景本の正徳年間(1711~1716年)写本の校合本ともいわれるものが, 愛知県図書館に所蔵され, 同館の貴重和本デジタルライブラリーの資料としてインターネット上に公開されている。この書は, 表紙に『國內神名牒』と『尾張神名帳』の二つの外題が併記されている。

内表紙に当たる部分に次の様な所蔵者名が記され, その次のページに天野信景の序

文が記されている。尾張國府宮威徳院蔵本の『國內神名帳』であるが、古い尾張國神名帳（後書に「元龜二年（1571年）正月十四日書 府中主満月坊真海持之」と記されている）の上に、デジタルライブラリーの書誌によると、天王坊本との異なる部分が朱書きで行間に追記され、さらに青書きで正徳年間写本との異動が上欄等の空きスペースに記されている。一部補助に切り紙を補って補筆している生々しい資料である。この神名帳には、八社明神といった記載はない。興味深いのは、松平秀雲（号君山）が、宝暦二年（1752年）に執筆した『張州府志』で北粕谷村（八社大明神）の社と考証した「正四位下 櫛屋天神」は、「正四位下 加知麻天神」とともに上欄に青で追記補足書きされている。ただし、櫛屋天神は神名のみ記され、所在については記されていない。以下、関連文書の関連部分を年代順に引用する。

『國內神名帳』または『尾張國神名帳』 元禄十一年（1698年）

愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103283156-001.pdf>

（所蔵）

國府宮威徳院蔵本

國內神名帳

天王坊以一軸校合

正徳年写本ヲ以校合之

（序文）

尾張國內神名帳一卷 吾

中嶋郡国衙惣社威徳院

家藏之旧本也既及古弊不

忍見焉以故繕飾裱軸謹奉

納之冀使 八郡之神名永

傳萬葉也

天野源藏藤原信景百拜

元禄十一年戊寅重陽日

智多郡坐十四所 名神二所 天神十二所

正四位下 櫛屋天神

青書（正徳年写本との異同）で上欄張り紙を補完し追記

（所在についての記載なし）

次に天野信景が元禄十二年（1699年）にまとめた『参考尾張本国神名帳』の記載を示す。書誌上の資料として「序文」と「後書」部分も記載する。当該関連部分は、二行のみである。天野信景は、問題の櫛屋天神を市原村権現社（現在の武豊町）としている。

『信景 参考尾張本国神名帳 全』 宮内庁書陵部

[http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/owners/syuusyuu\\_list/list\\_syoryoubuzou.html](http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/owners/syuusyuu_list/list_syoryoubuzou.html)

新日本古典籍総合データベース

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100243715/viewer/1>

『参考尾張本國帳』 元禄十二年（1699年）八月二十五日

参考本國帳引

後醍醐ノ院建武ノ喪乱スム降古記實録多ハノ  
散亡ス普廣將軍レル權ヲ之日輯テ而録ス之蓋シ  
奏御スル者今有餘篇再ヒ阨メ應仁文明兵燹ニ  
文籍殆ト亡ヒス兵今搜テ古藏獲クリ神名帳ノ古本  
二三寫ニ詳畧同異無レシ所ニ適從充於レテ此ニ參伍  
考訂臚ニ寫メ此ノ卷ニ漸ク期ニ善本ノ大全ニヲ者ノ耳

元禄巳卯重陽月 藤原信景

参考尾張本國帳 或ハ云ニ國內神名帳ト

- 延喜神名式ト部ノ兼永ノ古本
- 貞治三年古本神名帳之写塾田ノ座主ノ藏本
- 元龜二年古本中嶋ノ國府ノ宮ノ藏本
- 一本不レ書ニセ年号ヲ吉見幸和ノ家藏

正四位下櫛屋神社 天神  
市原村権現社称

- 塾田ノ座主家藏ノ本ノ奥書ニ曰ク 依ニテ文治二年丙午三月ノ宣命ニ國中ノ諸神皆増ニスト位階ニヲ云此ノ本貞治三年甲辰正月七日古本之写也
- 謹テ按ニ類聚神祇本源末社ノ篇ニ光仁天皇實龜二年辛亥二月十三日令メ天下ニ定メ置カル於

諸社大中小一正一位ヨリ正三位スミ上リ為シ大社ト  
 従三位ヨリ従四位スミ上リ為シ中社ト正五位ヨリ従五  
 位スミ上リ為ス小社ト云凡ソ本國帳スミ二名神天神  
 地神ノ三品一ヲ分ツレ之ヲ不レ知ラ何レノ也定ムル焉又スミ右神ヲ  
 書スル明神ト者ノ帝紀間有レリ之又々按末萑院ノ天慶  
 三年正月白川ノ院永保元年二月崇徳院  
 永治元年七月高倉ノ院治承四年十二月  
 後鳥羽ノ院元歴二年三月諸國ノ神社授ケタル一  
 階ヲ見ヘタリ源平盛衰記ニ  
 ○夫レ神社ノ品位ハ神田之數也若三シ令ニ日フモ位田正  
 一位ハ八十町ニト凡ソ大社ノ四至九町也若キ明神  
 天神地神ノスミ是ヲ定ム幣物ノ多少一ヲ也

元禄十二年歳次巳卯八月二十五日

次に、天野信景が宝永四年（1707）に序文を書いている『本國神名帳集説』を引用する。この文献は、一般書誌名は『尾張國神名帳集説』であるが、愛知県図書館所蔵本は、外題が『本國神名帳 全』と題箋が貼られているが、序文には『参考本國神名帳集説序』と記されている。これも、当該の櫛屋天神を「枳豆志庄市原村權現ノ社」としている。要は、「櫛屋天神」という、それまで『尾張國神名帳』に記載のなかった社の神名を追記したとされる天野信景は、問題の櫛屋天神を枳豆志庄市原村の權現社としていた。

『本國神名帳集説』 第一卷 天野信景 宝永四年（1707）自序

享保十九年（1734年）転写

外題（題箋） 本國神名帳 （一般書誌名 尾張國神名帳集説）

愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103283156-001.pdf>

正四位下 櫛屋天神 枳豆志庄市原村權現ノ社ト

（市原村は、明治16年富貴村に合併消滅、昭和29年武豊町に合併）

『寺社名録』 七冊

成立 寛保二年（1742年）以降カ

書写 嘉永四年（1851年）転写

愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103268875-001.pdf>

寺社名録 七 知多郡

(大野庄)

同庄北粕谷村

右同宗同末

(右 禪宗岡田村慈雲寺末俊嶺山  
桂林寺)

一 寺内六畝六歩 備前検除 流水山隨應寺

一 薬師堂 一字 年貢地 庄屋支配

一 社二ヶ所 明神 山神 当村称宜 弥兵衛持分

社内 五反二畝歩 前々除

右全部七冊者成瀬内記所蔵

にして 古社にて舊事を志るし

書籍につき為寫にて官庫に納置

者也

嘉永四辛亥年八月 寺社奉行所

元治元年甲子六月一授り 宮崎謙蔵

この八社神社を巡る別の名称として、江戸中期に「櫟屋天神」が登場する。最初  
は、松平秀雲（号君山）が宝暦二年（1752年）に表した『張州府志』である。松平  
秀雲が、北粕谷村のこの八社大明神を『本國帳』すなわち『尾張國神名帳』に記載さ  
れている「正四位櫟屋天神」として考証した最初であろう。ただ、その典拠とした  
『本國帳』はいずれの書を指すのか定かではない。

『張州府志』 宝暦歳舍壬申春二月（宝暦二年1752年） 松平秀雲謹撰 千村伯濟校

【櫟屋天神祠】 在北糟屋村祀伊勢熱田八剱熊野多度八幡天王源大夫故稱八所

本國帳正四位櫟屋天神是也寛正三年壬午大草城主一色兵部少輔某重修之同四年癸未  
落成 神寶大般若經一部承久中所蔵也歴年為虫魚害之正和中僧慶蒿菅原景光共修補  
之

(名古屋史談會編纂 1974 張州府志 全 愛知郷土資料叢書 第十九集 愛知県  
郷土資料刊行会 張州府志 第六 卷第二十九智多郡 神祠 p. 740)

その説をそのまま踏襲するかたちで、安永年間頃（1772～1780）に内藤正参が執筆  
した『張州雜志』でもその別名称が書かれている。



『蓬州旧勝録』 安永八年（1779） 蛙面坊茶町 自序

愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/28.html>

十八 知多郡 大野庄

社人

○八社大明神社

北粕屋村

青木弥太夫

本宮大社二棟

撰社左右ニ二社

石鳥井

拝殿 鐘樓

（大日堂

是ハ 村扣也

十王堂

祭六月ノ間山車一輛提灯を灯シ神前へ曳渡ス 試楽と云ハ

無し亦臨て舞の屋台を廻り行列にて渡し神前にて舞う

六月亦八月祭とせり 是ハ八月の間に境内大森見渡廣林本大社之 印

○ 北粕谷村寺内

禅臨岡田村慈雲寺末

六畝六歩備前除

流水山隨應寺

本尊釈迦仏

中興開山心嘗鉄首座

開山慧甫室首座

建創時代不レ知

十九

○神名帳集説ニ 出リ宮社地名不レ分部

式外

一 正四位下櫨屋天神

枳豆志庄市原村称ニ権現社ニ

『張州雜志』 安永年間頃（1772～1780）内藤正参（雅号東甫）領内調査執筆

赤林信定編纂，寛政元年（1789年）藩主宗睦に献上

北糟屋村

大野庄

自府内八里船路七里

高九〇六石七斗六升七合

広高六百五十八石九斗二升

小川一所

池六所

神祠

櫨屋天神祠

社司青木氏

祀伊勢熱田八劔熊野八幡天王源大夫故稱ニ八所ニト

本國帳正四位櫨屋天神是也

寛正三年壬午大草ノ城主一色兵部少輔某重修之  
同四年癸未落成

祭禮正月管祭 六月車一輛 九月  
神宝

大般若經一部承久年中所蔵也暦年為蟲災害之  
正和中僧慶蒿菅原景光共修補之  
鐘樓在境内 鐘銘曰美州不破郡清水寺奉鑄治鐘  
宝治元丁未九月廿二日東大寺大工此下文 字不見

棟札曰

大日本國尾張國智多郡大野惣社八所宮之目  
録之次第大破及び事式十年斗其後一色殿聞被及  
代官被仰而地下人談合ニテ寛正三年壬午六月  
廿六日新始同八月廿二日未之時柱立十二月此間不分明  
同未歲棟上祝申此間不分明次申之歲正月廿九  
戊亥之時移申不分明其後仕候事文明二年庚寅  
十二月四日棟上申候其先一色兵部少殿御下向  
有而三河別此間不分明為打取大野にて勢そろへ 廿  
三日二打立此間不見御棟上之御祈禱為御料足千疋御  
太刀一振八所御寄進加是而此間不見  
御棟上申候此間不見  
江州浅井郡南此郷此間不見  
豈文明式年更亥十二月四日  
旦此間不見北一色此間不見願主敬白

(豈)

流水山隨應寺

臨濟宗属ス岡田邑慈雲寺ニ

葉師堂 本尊行基作

客殿本尊阿弥陀 作不詳

開山慧甫首座年代不詳

中興心營鉄首座寛文三年癸卯十一月寂

(愛知県郷土資料刊行会 1975 (昭和50年) 名古屋市蓬左文庫蔵 張州雜誌  
張州雜誌 第五 知多郡 北粕屋村  
復刻版 名古屋市蓬左文庫蔵 張州雜誌第一卷 第五 pp. 426-430 愛知県郷土  
資料刊行会)

文政五年（1822年）に樋口好古が著した『尾張徇行記』という書物があり、愛知県郷土資料刊行会が昭和59年に『名古屋叢書続編第四巻尾張徇行記(1)～第八巻尾張徇行記(5)』として復刻している。これは尾張領内の地誌がかなり詳しく記述されている。全三九巻あるが、一部所在不明となった巻があり、北粕谷村が含まれる知多郡大野庄の巻二十四も所在不明となったままである。

### 『尾張名所圖會』

愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103264400-001.pdf>

前編 巻六 岡田文園・野口梅居著 小田切春江・森高雅絵 天保九年から天保十二年（1838～1841年）

前編巻一～巻七 天保十五年（1844年）刊行 後編巻八～巻十三 明治十三年（1880年）刊行

（第六 百七-百八頁 復刻版 尾張名所図会（中巻）  
六ノ五十四～六ノ五十五

櫛屋天神社 北糟屋村にあり伊勢・熱田・八劔・熊野・多度・八幡・天王・源大夫を祭る故に八所権現と称す本國帳に正四位櫛天神とある是也寛正三年壬午大草城主一色兵部少輔某重修せり  
神寶 大般若經一部 承久年中よりの所蔵にして、年久しければ蟲蝕せしを正和年中僧慶篤及び菅原景光これを補修せり

次に、天保15年（1844年）に深田増蔵正韶が撰した『尾張志』を引用する。

『尾張志』 天保15年（1844年）序 後世後期写

愛知県図書館貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/32.html>

深田増蔵正韶撰

植松庄左衛門茂岳謹校

中尾八郎右衛門義稻謹輯

岡田六兵衛啓謹輯

卷之五十五

智多郡 村里の部

北糟屋村

岡田の西南名古屋の南八里にあり舟路より七里とす 本國帳に正四位下<sup>カシヤ</sup>櫨屋天神とある櫨屋はかしやにて此地なるべし

卷之五十八 智多郡 神社

櫨屋社

北粕谷村にありて氏神として八社大明神と称し熱田 伊勢 熊野 八劔 多度 八幡 源大夫 牛頭天王の八神を祀る本國帳に正四位下櫨屋天神とある是也天野信景が説に市原村の権現社と此（本）國帳の神とせしは櫨文字をいちるとよめばいちやとし市原に近しと思へるなり

八社明神ハ寛正三壬午年大艸城主一色兵部少輔の重修にて翌四年成就して神寶に大般若經一部承久年中より所蔵ありしが蟲魚にそこなひしを正和年中僧慶蒿及び菅原景光等修補せしよし府志にいへり今猶正月十六日大般若經執行といふ事ありて大野村の海音寺の寺役とす

幕末の天保年間に書かれた『尾張名所圖會』『尾張志』とほぼ同時代の天保年間（1830～1844年）に書かれた名古屋市立蓬左文庫所蔵の『知多郡之記』という書籍があるが、この「北粕谷村」の記載には、社寺の数のみが記され具体的な寺社名は記されていない。

一 社々ヶ所

一 寺々ヶ所

### 『国内神名帳考異稿』

愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103267822-001.pdf>

島田清江周辺 明治頃（慶応年中） 第一巻

知多郡

正四位下櫨屋天神

明應本天文本甚目本正徳本俱無異 天野本

正作徒

### 『尾張神名帳集説訂考』

愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103266745-001.pdf>

津田正生著 水穂部穂積追補

嘉永3年（1850年）序 明治2年（1869年）追補



明治2年(1869年)写

第八知多郡

正四位下 櫟原地神 原字通ノ本誤レ屋  
一本作天神

〔集説云〕 枳豆志庄市原村称権現社

〔正生考〕 社号ハ伊知波良地ノ神 と讀むなるべし。中嶋郡  
乃式外に櫟江天神の市乃枝村にある例の如し

〔府志〕 加志也と訓て。北粕谷村といふハ非なり

参考

本国神名帳集説

中嶋郡

従三位櫟江天神 大柄庄市野ノ枝村 今ハ属<sup>ニ</sup>  
美濃<sup>ニ</sup>

(櫟江神社 岐阜県羽島市下中町大字市之枝2098)

宝暦二年(1752年)に松平秀雲が『張州府志』に記し、安永年間頃(1772~1780)内藤正参が執筆した『張州雑志』以降、『尾張名所圖會』『尾張志』と櫟屋天神は北粕谷村の八社明神とされたままであった。しかし、明治初年に刊行された二冊の書籍は、異を唱えている。島田清江の慶應年間から明治初年頃『国内神名帳考異稿』は、正四位下櫟屋天神は、天野信景が初めに記したものであることとしている。また、嘉永3年(1850年)序 明治2年(1869年)追補とある津田正生著の『尾張神名帳集説訂考』は、「櫟屋天神」は「正四位下 櫟<sup>いちほらチジン</sup>原地神」の誤記ではないか、またそれは市原村の権現社ではないかという説を主張した。

いずれにせよ、天野信景が編集した『尾張國神名帳』もしくは『参考尾張國神名帳』が、「正四位下櫟屋天神」という神名(社名)の最初の出典であり、松平秀雲が『張州府志』で「櫟屋天神」の出典とする『本國帳』はどの出典をさすのか、市原村の権現社ではなく北粕谷村の八社明神と考証した根拠は何であったかといったことは、もう少し検討する必要がある。

## 謝 辞

本研究は、播磨学研究所副所長の小栗栖健治先生に貴重なご助言をいただいたことを記し感謝の意を表します。隨應寺十王堂・大野谷虫供養当人で北粕谷祭り保存会副会長の青木哲雄氏、知多市文化財保護委員の久野與吉氏、八社神社氏子総代青木三蔵

氏、大野谷虫供養北粕谷道場堂守で隨應寺十王堂堂守加藤隆儀氏をはじめとする北粕谷区の皆様には、調査の機会を与えていただき、また貴重な情報をご提供いただきました。古文書の翻刻に際して、梶山女学園大学文化情報学部の飯塚恵理人教授、古文書研究家の松平繁明先生にご教示いただいたことを記し感謝申し上げます。

---

#### ■注

- 1) 平仮名で「なむふどや なむたもや なむすんぎやや なむびしゅだしやや なむあかかふしやや……」で始まる陀羅尼であるが、有賀（1998）の『縮刷版 グラニ大辞典』などにも、類似した陀羅尼は見いだせない。

---

#### ■引用文献

- 有賀要延（1998）縮刷版グラニ大辞典 国書刊行会  
江端祥弐（1999）大野谷風土記 私家本  
萩原龍夫（1983）巫女と仏教史—熊野比丘尼の使命と展開— 吉川弘文館  
北粕谷区（1984）八社神社御造営記念 八社神社御由緒累記 私家本  
宮川充司（2019）熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(Ⅹ)—新出北粕谷区本の階層的クラスター分析による分類— 梶山女学園大学教育学部紀要, Vol. 12, 23–41.  
小栗栖健治（2004）熊野観心十界曼荼羅の成立と展開 塵界（兵庫県立歴史博物館紀要）, 15, 129–242.  
小栗栖健治（2011）熊野観心十界曼荼羅 岩田書院  
坂本要（2019）民間念仏信仰の研究 法蔵館  
知多市誌編さん委員会（1978）北粕谷村絵図 知多市誌資料編一 知多市役所  
知多市誌編さん委員会（1978）近世村絵図集（解説） 知多市誌資料編一 知多市役所  
立松宏（1981）武士の登場 知多市誌編さん委員会編 知多市誌 本文編 第二編歴史 第二章古代・中世 知多市役所 pp. 116–124.  
杉崎章（1981）古代人と荘園制 知多市誌編さん委員会編 知多市誌 本文編 第二編歴史 第二章古代・中世 知多市役所 pp. 107–115.  
立松宏（1983）八社神社本殿（北粕谷） 知多市誌編さん委員会編 知多市誌資料編二 第3章 建造物 知多市役所 pp. 414–415.  
竹内謙治（1983）社寺棟札 八社神社（北粕谷） 知多市誌編さん委員会編 知多市誌資料編二 第4章金石文 知多市役所 pp. 484–485, pp. 524–527.  
山田勝美監修 「難字大鑑」編集委員会（1987）異体字解説字典 柏書房